

2. 「スピーチプライバシーの国際動向 についての東京講演会」報告

9月8日(木)、本会主催による「スピーチプライバシーの国際動向に関する東京講演会」が、ヤマハエレクトーンシティ渋谷において開催されました。この講演会は、スピーチプライバシーの国際的権威者であるデイビッド M.サイクス氏のインターノイズ2011大阪大会への来日に合わせ、東京講演として企画されたものです。このテーマは本誌152号の特集でも取り上げており、この特集号に寄稿頂いている清水寧東京工業大学教授、羽入敏樹日本大学准教授にも御参加頂き、国際動向とその現状という内容で御講演頂きました。

当日は、技術者、研究者の他、学生の姿も多く、180名収容の会場もほとんど埋まるほど盛況でした。

終了後の質疑応答も活発に行われました。



講習会の様子

〔講演内容〕

- (1) 執務空間におけるスピーチプライバシー改善の全体像と現状

David M. Sykes 氏 (Co-Chairman, ANSI S12WG4)

[日本語通訳：清水 寧 氏]

- (2) スピーチプライバシーの現状とその方策

清水 寧 氏

(東京工業大学 大学院総合理工学研究科 教授)

- (3) スピーチプライバシー保護のための建築音響技術

羽入 敏樹 氏

(日本大学 短期大学部 建設学科 准教授)

スピーチプライバシーは、近年日本においても必要性が高まっている、公共施設空間等における会話の秘話性に関する研究です。



David M.Sykes 氏

サイクス氏の講演では、北米においては約60年前より“Speech Privacy”という言葉が使われており、現在では“emerging market”と表現されるように発展が期待される分野であり、世界中で取り上げられて研究がなされているとのことでした。具体的には、北米のモダン建築におけるオープンプラン型のオフィスにおける“Speech Privacy”に対する関心から研究が発展していった過程についての説明がありました。

日本では“Speech Privacy”の歴史は浅く、研究の背景をとらえるのはなかなか難しいように思われます。そのため、長年研究されているサイクス氏本人より、“Speech Privacy”がどのように発展してきたのかを聞くことのできた本講演は、非常に貴重であったと感じました。北米では、実際に“Speech Privacy”関連の訴訟も数多く起こっているようで、今後もますます研究を進めていくことが必要であるという印象を受けました。



清水 寧 氏

2. 「スピーチプライバシーの国際動向についての東京講演会」報告

清水氏の講演では、北米での“Speech Privacy”の研究が、日本においても適応できるのかを、“Normal Privacy”と、“Confidential Privacy”というプライバシー感の違いを表す表現による説明がありました。すなわち、日本とアメリカのプライバシーに対する感覚には違いがあり、そのまま適用できないという問題です。

清水氏によると、日本においてはプライバシー感を、個人的なことや企業の機密内容を話しているときに聞かれないと感じる音漏れに対する感覚を意味する“Confidential Privacy”と考える傾向が強いようで、これは北米の執務空間において感じる、日常の生活をしている時に邪魔にならないと感じる音漏れに対する感覚である“Normal Privacy”とは異なるという考え方で、そのため、この2つを区別して扱わなければいけないということに関して丁寧な説明がありました。



羽入敏樹氏

羽入氏の講演では、実際に調剤薬局におけるスピーチプライバシーの実態調査と、室内音響理論に基づく対策に関する研究についての説明がありました。

羽生氏は、実際の調剤薬局における音環境を把握す

るために行った、物理測定と聞こえ方の評価に関する調査において、パーティションによる遮音効果の測定結果を示し、衝立等による遮蔽効果の対策が有効であることを報告されました。これらを踏まえて、北米において“Speech Privacy”に対する設計手法として用いられている、ABCルール(Absorption, Block, Cover up)が重要であることの説明がありました。

ABCルールとは、室内の吸音処理(Absorption)、遮音・距離減衰による音の遮断(Block)、漏れてくる音をマスキング音で聞こえにくくする(Cover up)というスピーチプライバシー対策における基本的な3つの考え方のことです。

また、羽入氏は効率の良いサウンドマスキングシステムも開発されており、今後の適用の可能性についても示されました。



質疑応答のーコマ

“Speech Privacy”という日本においてはまだ新しい研究分野を進めるため必要な、今までの歴史と現状、今後何が必要かということを理解する上で、非常に参考になる講演であったと思います。